

住んでよし、訪れてよしの沖縄は官民連携で目指す。

中国語、英語はもちろん、これはフランス人か、ロシア語も、タイ語も聞こえるな…。

沖縄タイムス本社のある那覇市久茂地はビジネス街ではあるが、那覇空港や国際クルーズ船が寄港する那覇港が近くにあり、国内外の観光客が行き交う。

中でも近年、目立つのが外国客の多さだ。オフィスの外に出ると、冒頭のようにいろんな外国語の会話が聞こえてくる。全国同様、インバウンド来訪がここ沖縄でも盛んだ。

2017年度の沖縄を訪れた観光客は約957万人で、前年度に比べ約81万人も増えた。5年連続の記録更新である。外国人は56万人増加し約269万人を占めた。純増数の約7割が外国人の増加である。

2010年度は30万人ほどだったから、急増ぶりに驚く。東京でも、那覇の国際通りのにぎわいぶりは話題になっているようで、「一度見ておきたかった」という感想を何度か聞いた。

観光が主力エンジンとなっている沖縄経済は、好調で、景気拡大が何年も続いている。ホテルの建設ラッシュはすさまじいし、インバウンド需要を取り込もうと県外からの外食、小売業の進出も著しい。沖縄経済はこれまでと変わった、異次元のステージに入ったとみている。

気になるのは県民がこの波を十分に取り込めていないと感じることである。

最近、沖縄県が観光に関する県民意識調査を発表した。観光が経済に重要な役割を果たしていると考える人は86・4%に上った。一方、観光の発展が自分の生活の豊かさにつながっているかの問いには、「思う」との回答が29・1%にとどまった。

生活の向上を実感できなければ、観光、ひいては沖縄経済の土台が揺らぎかねず、騒音や交通渋滞、異文化の摩擦などといった負の面がクローズアップされるようになる。住んでよし、訪れてよし、そんな沖縄を目指す官民の連携が必要だと痛感する。

沖縄タイムス社 編集局政経部長 宮城栄作



2017年度に沖縄を訪れた観光客約957万人のうち、インバウンド来訪は約269万人。純増数の約7割が外国人の増加。